

蛇

美 知 代

節衛様、貴様何日頃御出京きの、前川さんの安原さんは昨夜御歸京をすつてよ、遣度は妹さんと御一處で姉様よりも色白のお美しい、それで本當に音無し相お方、まだ御知己しあい共、何でもいくちやんつて御名前らしいの。キーチちゃんね、唯々裏の土手で蛇にかまれて、今朝小母さんがお醫者様へ連れて行やら随分大騒ぎ、面白から早く歸つてらつしやいさよから——都の八重ちやんからよこした此端書、私は思はずも吹き出して「だから云はさい事じや無い、罰だわ」けども考へると可哀相、だつてキーチちゃん人並から病人かのですもの。キーチちゃんどて昔から彼様した人間では無く、七八つの頃迄は親の慾目計りでは無い、伶俐だ——と此近所での賛められ者でありましたのあれど、ふとした事で烈しく頭腦を打ちつけて以来産れもつかぬ病氣者にあつたのだと、お母さんは不問悟りに仰有つてお泣きでしたが、世間では兎角變を噂を立てまして、以前小母さんとの折合が面白く無く、

始終辛く當られて居た姑と云ふのが、何でも面當てに恐ろしい變死をしましたので、其怨靈がキーチちゃんに取付いて、それでお母さんが彼様した苦勞を一生しかければならぬのだと云ふのです、ついで一家内彼の家の人達から祖母さんのお話を聞いた事もなければ、此方から尋ねる譯にも行きません、それに一体小母さんと云ふのが可笑しい程氣位の高い人でして、ぐつと人を見くびつた機を、私共が此處へ越して來ました當座も、一つ井戸の水を飲んで同じ露路に朝夕顔を見合ひながら、此方から御挨拶しさい限りは、ついに一度先方から頭をお下げをすつた例は無く、あんば何でも餘りだ、幾ら新參者だからつて其様に迄繼しめられる譯は無い、先方が先方から此方も此方だ、何の構ふ事は無いと時には思はぬでもありませんでした共、何時迄たつても知らん顔をしてらつしやるんでもの、極り悪さについ根負けして言はさいでも好い愛想の一つも申ませんが、瘦形のすらりとした蒼白めて病身相を四十七八か九でもありませんか、油氣も無く亂れかゝつた髪をかきあげもせず、銘仙ではあるが肩の邊り膝の邊り、縦糸のぬけて黒く縞目の分かぬ、落ぶれ士族よ

ろしくと云つた服装で、夕方かんとよく露路から往來を見越して「キーチや、キーチや、姜のキーチは何處行つたしらん」と拵走つた上方かまりで呼び乍ら、さも遺溺無げに身をもんで被居る處を見ては、如何にも氣の毒で、もしや小母さんも氣かふれてるのじやあるまいかと思ひ／＼するのですが、例の祖母さんの一件について、或時そつとキーチちゃんを當つて見ますと、如何でせう。

「本當です共、節衛様はまだ御存じさい共、玄關の次ぎに三疊がありますよ、今はね毀れたつらだの何だの物置に成つて居ますが、其處でさあ、僕が誰よりも一番早く見付けて、突然大きな聲で怒鳴つちやつたの、だつて遺塵おつかあい願してるんですものね」つて、いとゞ大きき光つた眼を圓くひいてギリギリ齒を噛んで見せるじやありませんか、祖母さんは全く咽喉を突いてお果てあのですつて。

父様は七八年前にお死亡ですが、性は高と云ふ一字で以てかうのと讀み、奈良朝以來引續いて禁裡の伶人だとか、兎に角大層御名譽を家格に相で、私も引越して初めてのお正月、是非見に來て呉れど度々キーチや

んにせつかれて、近所づから行かぬのも悪いものですが、御年始旁拜見に上りましたが、八疊のお塵敷の床の間の正面に、從一位高大明神の一軸が麗々しく飾られて、其前の八足の上には御神酒やらおかゝみやら立派に御供物が上つて居るのでした。で今は御總領の康さんが戸主でして、十四五歳の頃からお父さんの後を、宮内省へ御勤めなのですが、小母さんはこれも全く家柄のお蔭だと御自慢をさる。誠に辛抱人で朝はお目覚めから御出勤迄、夕方私共の宅の横手の露路を入つて御歸りだと思ふ間に、最早奥のお家でパイオリオンを調べて被居る、です共お可哀相に御弟妹は多し加之キーチちゃんの様を六ヶ敷いのがあつて、手助けにも成らうと云ふのは一人だつて無いのですから、行末中々の御苦勞じやありますまい、併しよくしたもので御弟妹皆を兄様を恐いものに、キーチちゃんの病氣が起つて暴れる時でも「コラッ」と康さんの白眼がさくのです。

キーチちゃんの本當の名は忠清と云つて立派かのがあり乍ら、何故か家内の人を先きに、小供の時から忠と清とも呼ばさいで、今日のキーチちゃん通つたので

すが、考へると不思議です、平常は誠に平静で、いつも懐ろ手の鼻歌か何かの上機嫌、今年廿歳ニジュウサイと云ふ好い年はしても、これと定つた仕事があるでは無し、終日の日をつい裏のお濠の土手に上つて、うそく遊んで来るか、何處と云ふあても無く近處隣りを話して歩か、楽しみと云へば折々縁日をあさつてお小使ひの貳錢參錢好きを植木に費す位が關の山、それで何處でも餘り歓迎せられぬ代り強て嫌からもせず、別して淺野——私の寄寓して居る家——の未亡人を好きで、裏の切戸から入つて、茶の間で奥さんがおほりをして被居る其傍の長火鉢の前に座り込んで、八重ちやんだの私だの機嫌よく相手におれば、種々罪の無い馬鹿話をして皆を笑はせるのですが、相手にからなければからかいでも、格別つまらぬと云つた様か様子は無く、半日位居て行くのです。(以下次號)